

「わたしがあなたの神だ」

出エジプト記 第3章1～6節

説教 本庄侑子伝道師

今朝の聖書箇所には〈モーセの召命〉というタイトルがつけられています。〈召命〉は、英語では〈CALL、CALLING〉と訳され、〈名前を呼ぶ、電話をかける、目を覚まさせる〉という意味を持ちます。教会は日曜日ごとに〈神様からの呼びかけ、着信、目覚まし時計〉を受けてきました。教会の礼拝は神様からの〈召命〉が起こる場所です。

「モーセよ、モーセよ。」(4節)かつて、神様からの〈召命〉を受けた人物がいました。モーセです。〈召命〉は、モーセが羊飼いとて生きていた荒れ野で起こりました。それは、モーセが出かけていき、捜し求めて見出した、という話ではありません。モーセの日常生活の中に、神様が仕掛けをし、先回りして待ち伏せをし、声をおかけになったのです。

神様は言葉を続けます。「ここに近づいてはならない。足から履物を脱ぎなさい。あなたの立っている場所は聖なる土地だから。」(5節)モーセにとって荒れ野は不毛の地でも、神様にとっては聖なる土地でした。そこで履物を脱ぐ。それは、自分の権利を放棄する、ということです。生活の場を神様にお返しし、人生の権利を神様にお譲りするのです。私たちの目には荒れ果て、聖なる出来事など期待できないような生活や人生であっても、神様にとってその場所は、ご自分がお働きになる土地、聖なる職場です。

モーセはかつて、エジプトで殺人を犯しました。逃亡犯として逃げ着いたのがミディアンの地でした。そこで、ひっそりと家庭を築き、羊飼いとて生計を立て、平穏な暮らしを数十年送ってきました。そんな日常に埋もれていたモーセに神様はおっしゃいました。「わたしはあなたの父の神である。アブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神である。」(6節)これは、『あなたは神の民の一員である。』ということです。モーセよ、あなたもアブラハム、イサク、ヤコブに始まる神の民、〈召命〉を受けて歩んできた神の民ではないか。そう呼びかけられたのです。

当時、神の民はイスラエル人と呼ばれていました。モーセは確かにイスラエル人でした。しかし、他のイスラエル人がエジプトの奴隷であった中、モーセはエジプトの王宮の中で育てられました。ある時、王宮の外でイスラエル人がエジプト人に打たれているの見たとき、「モーセ

は辺りを見回し、だれもいないのを確かめると、そのエジプト人を打ち殺して死体を埋めた。」(出エジプト記第2章12節)イスラエル人仲間を思うモーセなりの〈神の民〉としての行動でした。しかし、モーセはイスラエル人に殺人犯として訴えられました。イスラエル人にとってのモーセは、自分たちとは違う、王宮の人物でしかなかったのです。事件は王宮の中にも知られることとなり、モーセはエジプトから逃げ出します。

逃亡先ミディアンでの第二の人生も数十年が経ちました。モーセは80歳を越え、イスラエル人であることをすっかり忘れていました。そんな時、神様の〈召命〉を受け、使命を与えられるのです。「今、行きなさい。わたしはあなたをファラオのもとに遣わす。わが民イスラエルの人々をエジプトから連れ出すのだ。」(出エジプト記第3章10節)モーセの脳裏には、かつての失敗が頭を駆け巡ったことでしょうか。何を今さら。私はとっくに燃え尽きてしまった。若さも残っていない。羊飼いとて、この土地で愛する家族と共に余生を平穏に暮らしたい。

しかし、神様はそのモーセを選ばれました。柴の中の燃え尽きなかった炎。それは、イスラエル人をエジプトから連れ出すためにモーセを用いる、という神様ご自身の熱情です。私たちが燃え尽きて、神様は燃え尽きません。神様は、自分の手で終止符を打つ私たちの前に立ち、はだかるようにして現れ、お語りになります。

教会は、日曜日ごとに〈神の山ホレブ〉に連れ出され、使命を与えられます。洗礼を受け、教会に連なるということは、履物を脱ぐということ。自分の熱情を燃やしては失敗して燃え尽き、また何かに燃やしては失敗して燃え尽きる。そのような人生ではなくて、決して燃え尽きない神様の使命に生かされるということです。私たちが諦めない神様の熱情が日曜日ごとに先回りをし、待ち伏せて、私たちの名を呼び、使命を与えます。

かつてモーセが受けた〈召命〉は、今朝、ここにも起こっています。柴が燃えています。燃え尽きない柴が燃えています。私があなたの神だ。私があなたの人生の神だ。「履物を脱ぎなさい。」神様の燃え尽きない熱情が、今朝も私たちに注がれているのです。

(記 本庄侑子)